

『キュロスの庭園』の歴史性

河野 豊

はじめに

ユダヤ・キリスト教文化圏における庭園に関する言説は、程度の差こそあれ否応なしに「エデンの園」を意識する。庭園がもつ政治性といった象徴的意味についてもまた同様である。即ち、楽園＝自然の脅威からの避難所、翻って自然支配、権力、秩序等々もすべて「エデンの園」を原理的に志向する。

イギリスでは16世紀から17世紀にかけて、庭園に関する言説が飛躍的に増大する。それには様々な理由があるが、おそらく最大の理由は、この時期のイギリスが、政治的社会的に大きな変動を経験したことである。その変動の中で、「庭園」というものが表象する多元的な意味が多様な言語形式で表現されてきた。

そうした言説の一例として、フランシス・ベーコン (Francis Bacon, 1561-1626) のエッセイ、「庭園について」(1625) を見てみると、その冒頭は「全能の神は初めに庭園を作られた。確かにそれは人間の楽しみの中で最も純粋なものである。人間の気分を最も爽快にしてくれるものである。」¹ という有名な一節で始まる。それに続いて、ベーコンは理想の庭園の構想をめぐらせるのだが、理想的であればあるほど、それは「エデンの園」に似通ったものになってくる。ベーコンの庭園の周りの「荒野」を見れば明らかである。また、ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-74) の『失樂園』(Paradise Lost, 1667) が、王政復古後のイギリスに対する幻滅を表しているものとなれば、その政治性はより顕著になるだろう。

いわゆる文学以外にも、例えば、16世紀のトマス・ヒル (Thomas Hyll (Hill), 生没年未詳) や17世紀のジョン・イーヴリン (John Evelyn, 1620-1706) は庭園あるいは植樹についての実際的な著作を残したが、それとて時代の政治的社会的状況と切り離して考えるわけにはいかない。

かくして、その時代の「庭園」についての言説は実際の庭園にまして様々な意味を孕んでいると言える。庭園を論ずるということは単に美意識だけの問題ではない。

さて、小論は、そうした様々な意味をもつ言説の例として、トマス・ブラウン (Sir Thomas Browne, 1605-82) の『キュロスの庭園』を検討し、時代と思想の文脈の中でその位置づけを試みることを目的とする。²

1

まず、『キュロスの庭園』とは一体いかなる作品であろうか。

『キュロスの庭園』(The Garden of Cyrus, or The Quincuncial, Lozenge, or Network Plantations of the Ancients, Artificially, Naturally, Mystically Considered, 1658) は、その副題によ

れば、「五点形、菱形、網形による古代人の植樹法——人工、自然、神秘からの考察」である。『キュロスの庭園』において、ブラウンは、自然の中のあらゆるものに「五点形」(賽の五の目形)が見いだされることを実証しようとする。³ そして自然の秩序が「五」という数字に基づいていることを示すために、ブラウンは博物学者 (naturalist) として自然を探求する。

サミュエル・ジョンソンの言葉を借りれば、それは「ほとんど取るに足らぬ主題」である。⁴ 別の批評家は、『キュロスの庭園』は、『医師の信仰』(*Religio Medici*, 1643)ほど深遠でもなく、『謬見蔓延論』(*Pseudodoxia Epidemica: or, Enquiries into Very many received Tenents, and commonly presumed Truths*, 1646)ほどまじめな意図もなく、『壺葬論』ほど想像力を刺激するわけでもないと言っている。⁵

ハントリーが『キュロスの庭園』と『壺葬論』との関係を明快に論じるまでは、上のような見方が一般的であった。⁶ しかし、『キュロスの庭園』は、ブラウンの読者にとって一つの試金石ではないだろうか。信仰について述べた『医師の信仰』や、無知蒙昧な「非科学的」俗説を退けようとする『謬見蔓延論』を称賛する人は、それらの文体はもちろん内容も重視していた。特に『謬見蔓延論』については、ベーコン的近代科学精神の基礎となる観察と実験という方法論の実践の書であるとみなされてきた。それらと比べて、『キュロスの庭園』の文体は見事だけれども、内容の方は取るに足りないと考える人は、ブラウンの博物学者としての側面にさほど魅力を感じないのかもしれない。博物誌 (natural history = 「自然史」、「自然誌」) は、ブラウンが頻繁に引用するプリニウスの『博物誌』(*Naturalia historia*)に代表されるように、自然界のあらゆる事象の百科全書的記述である。

博物学は系統だった分類よりも、「全て」を記述しようすることに重きを置く。『謬見蔓延論』もその一種であることに変わりはないが、単なる記述というよりも、誤謬の訂正を試みるものだったので、博物誌そのものという印象はやや薄れている。ところが、『キュロスの庭園』は、「五」という数字にまつわるあらゆる逸話、伝説、自然界の現象の集大成という印象が強すぎ、前述のような評価を受けることになってしまったと思われる。

今日、「博物学」という学問は、動物学、植物学、鉱物学、地質学、気象学等々に細分化され、顧みられることは稀であるから、そういう態度をもつのもある意味では当然である。しかし、博物学は、エリオットの言ういわゆる「統一された感受性」の一つの表れであった。つまり、叙述の際に思考と感覚とが明確に区別されておらず、事実と虚構あるいは想像が入り交じるという点において、『キュロスの庭園』は、そうした感受性の産物であることを認識しなければならない。それでは、以下、各章の概要を順を追って見てみることにする。

『キュロスの庭園』は『壺葬論』と同じく献呈書簡と全五章からなる。⁷ 献呈書簡の中でブラウンは「大地は自然の庭園であり、実り豊かな各々の国は楽園です」と述べている。⁸ そのように大地そのものを庭園とみなすのは、自然を「神の庭」として見る伝統的な見方の反映である。

まず第一章は、五点形の歴史的地理的調査であり、先述した通り、天地創造と後のあらゆる庭園の原型となるエデンの園についての記述から始まる。

もし楽園が造られたのが天地創造三日目だとすれば、…庭は庭師以前に存在しており、それは大地が生まれてからわずか数時間後のことであった。(326)

ここでの「庭師」とは人間のことだが、人間の創造は天地創造六日目のことなので、上のような記述となる。それは奇想というほどのものではないが、ブラウンは聖書の記述を文字通りに解釈

することで、思いがけない見方を呈示する。これはブラウンの叙述の特徴の一つである。

その後、ブラウンはエデンの園がどこにあったかを文献上から推測し、更にバビロンの架空庭園へと話を進める。ネブカドネザルが造ったその庭園を美しくした者として、キュロス二世(Cyrus “the Elder” or “the Great”, 600?-529 B.C.)の名が出てくる。そこから、ブラウンは表題になっているキュロス(Cyrus “the Younger”, 424?-401 B.C.)に話をもっていく。ブラウンによれば、キュロスは「庭園の大家であったばかりでなく、手を使って植えた人」で、あらゆる話の中で、「規則正しく植える優れた人」でもある。その植え方は「見事に配列された並びであり、規則正しい角度をもち、四方に見通しがきくように五本の木が置かれた」ものであった。その植樹法が即ち五点形であり、それは、

その数を表す図であり、角で組み合わせれば文字 X、つまり明らかな十字形、根源的凶形(328)

である。

ローマ数字「V」を二つ天地を逆にして並べると「X」となることを述べたただこの一節に基づいて『キュロスの庭園』は構成されている。⁹ 章の数が全部で五章というのも同じ理由によるものと思われる。第一章は、エデンの園で始まり、その中央に生命の木と善悪の木とが植えられていたという記述で終わる。この導入部とも言える第一章の後、ブラウンは副題通り、第二章では人工物の中に、第三章では自然の中に、第四章と第五章では神秘の中に、五点形を追求していく。

次に、第二章の冒頭でブラウンは次のように述べ、歴史の中で人間が作ってきた様々なものを列挙し、それらにいかん五点形が見られるかを例証していく。

これは植樹を行う際の形だけではなく、様々な発明品や手仕事において古代から模倣されてきた。(334)

ブラウンが挙げているものは、建築、冠、寝台、椅子、貨幣、メダル、刺繍、ガラス窓、ソロモンの神殿、ヘーパイストスを封じ込めた網、紋章、宝石細工、田舎のまじない、チェス盤、バックギャモンの盤、ローマ軍の布陣、最初の住居の配置、黙示録の中の都、オペリスク、ニネヴェの町、モーゼの律法の板、メガラの市場等々、実に多岐にわたる。ごく小さな貨幣やメダルからソロモンの神殿やニネヴェの町といった巨大な建築物にわたる様々なレベルの人工物において五点形が見い出せるのは、博識家ブラウンならではのである。

第三章では、自然の中における五点形が語られる。『キュロスの庭園』全五章の中で、この第三章の占める割合が最も大きい。第三章の長さは、第一章と第二章を足した長さにはほぼ等しく、また、第四章と第五章を足した長さにもほぼ等しい。その長さを見ると、ブラウンの自然に対する観察と研究の深さと広さがうかがわれる。

その中で、ブラウンは植物の記述から始めているが、彼にとって、植物は愛好的であり、驚異の対象であった。¹⁰

ほんの小さな種子が大きな姿に生育していくのは自然の驚異の一つである。それはある程度天地創造の御業と無からの膨大な創造とを例示している。(351)

ブラウンにとって植物は生命力そのものであった。そして後述の通り「五」という数字もピュタゴラスの数秘術では生命力の象徴であった。ブラウンは、花や草に始まり、昆虫、蛇、ピーヴァー、天体、鳥、人体、鯨など自然界の様々な対象の中に五点形を見出していく。しかも単に外的な姿だけではなく、それらの運動についても同様の作業を続けていく。その過程はまさに自然の観察者ブラウンならではのものである。しかし客観的描写と思われるものの中にもブラウンの思考パターンが表れる。彼の性格上、空想、奇想に耽らないでいることは困難である。

また、第三章におけるブラウンの記述は子供が無心に昆虫標本に熱中している姿を彷彿とさせる。確かにブラウンの自然に対する姿勢は、一種の収集狂のそれである。ありとあらゆる現象を記述することは、自然の中に、秩序（あるいはその背後の神）を見出したいという衝動の表れであろう。

この第三章で興味深いのは、自然＝書物の観念が登場することである。

熱心な観察者なら自然という整然とした書物の中にもっと多くの類似物を見出すかもしれない。(360)

この「熱心な観察者」というのはブラウン自身のことなのだろう。自然について語るとき、ブラウンの頭には常にアナロジーとしての書物があつた。それは17世紀にはありふれた喩えであつたが、それ以前のガリレオにも共通の観念であつた。ガリレオは自然という書物は数学のことばで書かれていると言つたが、ブラウンにとってはまず第一に博物誌（自然誌）であつた。そこには神の叡智が働いているという考えは『医師の信仰』においても語られている。¹¹

ガリレオと同じく、ブラウンも数学的秩序を自然の中に認めたけれども、ガリレオとの違いはそうした博物学的関心の有無にある。ブラウンは数学という抽象的なものを常に自然の具体物を通して考える。その逆もまた然りである。そういうブラウンの感受性がガリレオには欠けていたのかもしれない。ブラウンは抽象的思考には縁がない。

さらに第四章では植物の生育に必要な光と陰についての考察から、光＝神のイメージが語られる。

まずブラウンは種子自体は永久の闇の中にあることを指摘した後、闇と光について次のように述べる。

闇と光は交代できる主権をもち、交互に生物の生殖の状態を支配する。ブルトーにとっての光は、ジュピターにとっての光である。(375)

事物を見えるように、またある物は見えなくする光。もし闇と地球の影がなければ、天地創造の最も高貴な部分も見えないままであつただろう。(375)

生それ自体は死の影に過ぎず、離脱した魂は生き物の影に過ぎない。万物はこの名の下にある。太陽自体は暗い幻に過ぎず、光は神の影に過ぎない。(376)

これらの言葉に見られるブラウンの考え方には、ヘルメス思想、新プラトン主義の影響が顕著である。それらをまとめて神秘主義と言い換えてもよい。そうしたブラウンの傾向は、最初の著作『医師の信仰』でも明らかであつた。

そして最後の第五章では、五点形の源泉とその意義について述べられるが、ブラウンは初めに

断っている。

こういう考察をこの数に適合させられる全ての神秘と秘儀にまで拡張すれば、ピュタゴラス学説に耽る許されざる行為となるだろう。(379)

ブラウンはピュタゴラス学説に耽らないとは言いつつ、聖書やヘブライ＝カバラ思想から、「五」のもつ様々な意味を抜き出してくる。例えば、アブラハムは、元来はその名をアブラムと言ったが、ヘブライ文字の五番目にあたる「he」を加えることで、「五」のもつ生命力に恵まれ、多くの子孫をもつことになったと言われていること等々である。

そうしたピュタゴラスの数秘術に対するブラウンの関心は、『医師の信仰』（第一部第十二節）においていち早く表れている。

私はよくピュタゴラスの神秘的な方法と数の魔法を称賛してきた。(73)

つまり、若い頃からブラウンは、数秘術のもつシンボリズムに魅せられていたと言える。

それではなぜ、「五」なのだろうか。それは、「五」のもつ意味から自明であると思われる。ピュタゴラスによれば、それは次の通りである。

「五」はある偶数と奇数（二と三）の結合体である。ギリシア人のあいだでは五芒星形（ペンタグラム）が光、健康、活力の護符として使われていた。五は「第五元素」つまりエーテルを象徴する。これは低次の四大元素の攪乱から自由だからである。これが「均衡」とも呼ばれるのは完全数十を二つに等分するからである。

ペンタドは「自然」の象徴である。なぜなら、麦の一粒が種から出発し、「自然」の全過程を経て、自分自身の成長の最終形態として再び種に戻るように、五は自乗するとそれ自身に戻るからである。¹²

ブラウンは第五章の末尾近くで、この「五」という秩序を見出す範囲は自然にはまだ大きく残っていると述べる。

喜ばしい真理を思慮と目による観察によって確証できるものにする、私にはそれが真理という迷宮を辿る最も確実な道だと思われる。(386)

ブラウンのこうした姿勢には先述した通り、ベーコン的近代科学精神がうかがわれ、『謬見蔓延論』はそうした姿勢で書かれたと言える。しかし、『キュロスの庭園』の読者は、ブラウンの言葉とは裏腹に、ベーコン的精神をあまり感じないだろう。それはブラウンの神秘主義への傾向があまりにも強烈だからである。ブラウンは、第五章の最後の方で、「天の五角形が下ってくる。知の五つの門を閉じる時だ。」と言って、眠りに就く前に、次のように述べる。

全ては秩序に始まったし、秩序に終わるだろう。そして、秩序を定め給う者と、天の都の神秘的数学に従って、再び秩序に始まるだろう。(387)

人工物、自然、神秘の中における五角形の追求はこうして終わる。第一章の大地から始まり、

第五章の天の都で終わる『キュロスの庭園』は、下（大地）から上（天）への精神の運動の軌跡を示している。我々はブラウンにつき合って、エデンの園の後、彼の視線が、身近な日用品から始まって、外の世界へ、自然の中へ、そして天にまで向かうさまを見る。ブラウンは、『キュロスの庭園』の読者を、自らと同じように秩序へと目を向けさせようとしている。それは天上の神を求めるブラウンの信仰の表れでもある。

『壺葬論』の中でブラウンは死すべき人間のはかなさを通して神の永遠に思いを馳せる。それに対して『キュロスの庭園』では、自然の中に秩序を見出し、そこに神の叡智を見る。前者が時間を通しての神の讃美であるとすれば、後者は空間を通しての讃美である。

2

『キュロスの庭園』の出版は1658年であり、『謬見蔓延論』の初版は1646年である。従って、様々な誤謬の指摘・訂正を目的とする「科学的」著作である後者を出版した12年後、ブラウンは前者を著したことになる。興味深いのは、前者即ち『キュロスの庭園』全体を通して見られる神秘への傾倒である。この頃にはすでに、ロイヤル・ソサエティの元になった「見えない大学」がロンドンで結成され、時代は近代科学への道を歩み始めていた。例えば、『ロイヤル・ソサエティの歴史』を書いたトマス・スプラット (Thomas Sprat, 1635-1713) は、真理の追究という目的の達成のために、ロイヤル・ソサエティの人々は、「自然の知識を、修辞の色づけや空想の考案物や寓話の楽しい作りごとから区別しようと努めてきた」と述べている。¹³ この言葉とはまさに正反対の文章を綴ったのがブラウンである。

17世紀は近代科学が興隆した時代、いわゆる科学革命と呼ばれる知的変革が起こった時代であった。その世紀の初めと終わりとは知的状況が全く異なっている。フランセス・イエイツ (Frances Yates, 1899-1981) によれば、その知的変革の背景にあるものとして考えられているのが、ヘルメス思想や新プラトン主義といった神秘主義や魔術思想である。ブラウンは敬虔な国教徒であったが、若い頃から異教を含む神秘主義に関心をもっており、また、異端思想にも興味があったと最初の著作『医師の信仰』にも書いている。¹⁴ だからブラウンにとっては、イエイツの指摘する近代科学勃興の背後にあるものは、きわめて身近なものであった。上述のように『キュロスの庭園』の中で、繰り返しそれらに言及していることからそのことは明白である。近代科学を推進したロイヤル・ソサエティの会員の中にも、神秘主義や魔術思想に関心を持つ人は数多くいた。¹⁵ しかし、彼らとブラウンとは同じような背景を持ちながら、実際に著した著作を見れば、その内容と文体の上での相違はきわめて大きい。その理由の一つとして、ブラウンはロンドンから離れた都市（ノリッジ）に住んでおり、彼らとの交際が手紙の上だけのものであったことが考えられる。そしてブラウンはロイヤル・ソサエティの会員でもなかった。

ここで、『キュロスの庭園』の副題を再び見てみると、それは、「五点形、菱形、網形による古代人の植樹法——人工、自然、神秘からの考察」というものであった。ここで、「人工」と訳した語は“art”の派生語 (artificially) である。“art”は「技芸」とも訳され、伝統的に自然 (nature) と対立する概念である。ブラウンは、“art”と“nature”を並べて置くことで、その伝統の上に立ち、さらに、「神秘」という語を付け加える。ベーコン的近代科学精神を持ったロイヤル・ソサエティの会員ならば、そんな余計な付加はしなかったであろう。それを付加するかしないかが、彼らとブラウンとを明白に分ける基準ではないだろうか。

おそらくブラウンは時代の精神を敏感に感じ取っていたに違いない。そしてその一つの表れが『謬見蔓延論』という著作である。しかし、彼はそれだけで満足できなかった。その結果が『キ

キュロスの庭園』なのだろう。

「庭園」とは自然の一部であり、人間が大なり小なり自然に手を加えてできるものである。そして人間の手が加わっていることから、庭園は、「人工、技芸」の要素も併せ持っている。つまり、庭園は“nature”であり、“art”でもある。庭園はこの二つの概念の複合物と言ってもいいかもしれない。17世紀はヴェルサイユ宮殿に代表される、いわゆる整形庭園の時代であった。キュロスの「庭園」も形式上は整形庭園だと言えるだろう。そしてその整形庭園のもつ秩序とは、神が自然に与えた秩序と平行なのである。ブラウンは、その秩序を見出すことが神の讚美になると考えていた。彼は、「自然は神の技芸 (art) である」と述べている。¹⁶ 神にとっての自然が人間にとっての庭園であり、ブラウンはそのことを十分理解していた。¹⁷ 秩序ある空間としての庭園を語る時、ブラウンは、神のことに思いを巡らさずにはいられなかった。ブラウンが、『キュロスの庭園』の副題に「神秘」という語を付加したのは、そのためであろう。

しかし、時代はブラウンの書法とは正反対の方向へ進んでいった。自然について語る際に、「神秘」ではなく、「力」及び「運動」をもってくるようになる。力学的自然観はもはや「神秘」を必要としない。ことさらに神を持ち出すこともない。それはブラウンにとって思いも寄らないことだったろう。近代科学の黎明期に生まれ合わせたブラウンは、その時代の複雑さ、つまり、中世以来の魔術的自然観、神秘主義思想と、観察と実験に基づく近代科学を生み出した時代精神とが混沌とした状況を生きた。そして、同じ状況下で生きたロイヤル・ソサエティの会員とは一線を画し、近代科学の方へ歩み寄ることはなかった。そのことが端的に表れているのが『キュロスの庭園』という作品ではないだろうか。

註

- 1 *Francis Bacon's Essays*, Everyman's Library (J. M. Dent & Sons, Ltd., 1906), 137. 以下、引用文の邦訳は、特に断りのない限り、すべて拙訳による。
- 2 筆者は以前に拙論「サー・トマス・ブラウンと「庭」」(『英文学』第70号、早稲田大学英文学会、1994)において『キュロスの庭園』のもつ意味について示唆をしたが、本稿はその続編にあたるものである。
- 3 最近、日本で類書が出版されたのは興味深い。西山豊著『自然界にひそむ「5」の謎』、ちくまプリマーブックス134 (筑摩書房、1999)。
- 4 Samuel Johnson, "The Life of Sir Thomas Browne" in *Sir Thomas Browne: The Major Works*, ed. C. A. Patrides (Penguin, 1977), 493.
- 5 Joan Bennett, *Sir Thomas Browne* (Cambridge University Press, 1962), 208.
- 6 Frank L. Huntley, *Sir Thomas Browne: A Biographical and Critical Study* (University of Michigan Press, 1962), 204-23.
- 7 献呈書簡の日付は五月一日で、ここにもブラウンの「五」という数字に対する偏愛が見られる。なお、書簡の献呈相手は、ニコラス・ベーコンという人物で、フランシス・ベーコンとは縁続きである。
- 8 *Sir Thomas Browne: The Major Works*, ed. C. A. Patrides (Penguin, 1977), 319. 以下、同書からの引用ページは本文中に示す。
- 9 言うまでもなく「X」はキリスト教の象徴である。
- 10 ブラウンは、別のところで「肉体の結合なしに、樹木のように子孫をもうけられればいいのだが」と言っている(『医師の信仰』第二部第九節)。
- 11 第一部第十六節。

- 12 マンリー・P・ホール著大沼忠弘・山田耕十・吉村正和訳『象徴哲学大系Ⅱ 秘密の博物誌』(人文書院、1981)、54-55.
- 13 Thomas Sprat, *History of the Royal Society*, ed. by Jackson I. Cope & Harold Whitmore Jones (1667; rep. Washington University, 1958), 62.
- 14 第一部第六節。
- 15 例えば、時代は少し後になるが、アイザック・ニュートンと錬金術との関係など。
- 16 『医師の信仰』第一部第十六節。
- 17 ブラウン以外では、アンドルー・マーヴェル (Andrew Marvell, 1621-78) もおそらくそうである。彼の詩、「庭園」(“The garden”, 1650頃執筆、出版は1681年)の中に出てくる「庭師」を「神」と解釈することもできる。神は「自然の庭師」と呼ばれることがある。